大和紀行

百骸九竅の中に物有かりに名付て風羅坊といふ誠にうすものゝ風に破れやすからん事をいふにや有らん かれ狂句を好こと久し 終に生涯のはかりごとゝなす ある時は倦て放擲せん事をおもひ ある時は進んで人にかたむ事をほこり 是非胸中にたゝかふて是が為に身安からず 暫く身を立む事をねがへども これが為にさへられ 暫ク学で愚を暁ん事をおもへども 是が為に破られ 西行の和歌における 宗祇の連歌における 雪舟の絵における 利休の茶における 其貫道する物は一なり しかも風雅におけるもの造化にしたがひて四時を友とす 見る処花にあらずといふ事なし おもふ所月にあらずといふ事なし 像花にあらざる時は夷狄にひとし 心花にあらざる時は鳥獣に類す

年々
芭蕉の初しくれは
時雨体とよむ今は
心もけるかなしみ
此初しくれより心を
年よりとをしさと
云ふるしき風骨
の誇也

行きかゝりて数々新す
まつかぜと出る数と旅れ
清浄と清浄の甲斐とし
彿ほは神前の中の行き
も定まらぬ所は風景の
行来なき所也

旅人と我名呼はれん初時雨　沾分

定に芝居宋の便船　沾分

初しくれ猿も小蓑をほしけなり

風しく庭す峯の有明　沾分

年くれぬ人も年寄る初しくれ

こと足る庵の口切　沾分

初しくれ
芭蕉翁の作の一体
行く人の面とみて
是初年の心に
眼を年く心を
闇しく初年の初年に
導き初句の姿
行く姿見ゆべし
候

此頃
芭蕉翁と
此ほしとまふ句

或人の方へ旅しけれ

初しくれ初の字を我か時雨かな

寂しし宿の内も墻次入　沾分

草枕犬も時雨るか夜の声

解しく庭しく解風　沾分

林氏初しくれの御志の心より
行方も尚行く人とや一句

此しくれ草の庵は旅ん望れ

ところほれ蝉のある句　沾分

山城へ井手の駕借る時雨哉

旅の旅いと時雨折　沾分

草菴

人ことしれと宿ハ定れも　汀砂

あみん問ふんいさ始言け

しはしくれ雲ともまて経て明信

明しく十夜の月ハ戻き　汀砂

一尾根ハ岳りしや富士の雪　汀砂

風ろハ馬しく気下と　汀砂

一尾根ハ
為行　富士の裾ハ
三ゟへ見こ添し太山
なれハ山の尾の開
ゆくもさりけるの
形見えし

川面や永の舳揃へれけて

気れ竹竜しへ總のね　汀砂

田里のんまし

川面や田の川岸の王尾

みな急し舟の さき　汀砂

宇田野　塚ゟ移りお

宿かしく名と冬の日ゆけ

家もよ川　流れの畑　汀砂

一川面　礫や渡し小石川

猿よ羽風し枯れ石蔵　汀砂

宿かしく
為行　冬の日の添
木書れ　塚ゟ見ゆ
猿人の猿ハ似合
しさ面見ゆ

馬方と
為行　川面の水と添
いにしへ先　高上ゟ下方
まるらに川なくれの
気色ハ見ゆる日
宿りとの見え申し
見下しきは川面
味し

高本の
為行　作本の猿ハ
冬しきなり　川面
の降すとし　聞ゆ
宿の色のうしといさ
悦しとハ四ゟ物し

下方ハ岳ゆし　川面の大井川

巨外の作りて宿りし

寝覚と宿と　明けゆきと　汀砂

高本の庭をといさめり行に

宿しみわたるとおもの色　汀砂

金　尾場しく

扉の松の昔さく吹氣

小総　笠つ風　無言ゆゑ　汀砂

弘氏唐中
弟子
博多の旅の人にも
てゆるこゝとも
ゆしてゝく

贈 洒堂

湖水の秋と言けれ 男様
芦月の地の地と出れよ
生しふしみかりうら侍
弘氏律や男様の蕣けるれ　汐ゝ

十川亭
[illegible]早きこゝと　汐ゝ

[illegible]
[illegible]とえしやあれ
採ふとこ宗の明る　汐ゝ
三新保 鍛師梓その毛

宗[illegible]此風あれ
[illegible]いゝ枝炭　汐ゝ

屏風ふハ山と逢しあれ
[illegible]の声ハ桁ねゝの下　汐ゝ

屏風ふと
弟子 朱元章
雪烟畳嶂之
圖題ノ来句に
短屏山影露微茫

鞆 [illegible]今と居

茶祝く
弟子
おなけるも弘氏侍の
冬[illegible]様
と心の世も祝
[illegible]

花祝人様と心の花れ　汐ゝ
[illegible]行宗[illegible]やゝ
梓[illegible]

あれ[illegible]
あれ[illegible]往
[illegible]子居　汐ゝ
弟子ハ説国巡り
[illegible]文れ
[illegible]

[illegible]荒[illegible]神の[illegible]　汐ゝ

都[illegible]
[illegible]和氷　汐ゝ
[illegible]神も[illegible]日[illegible]

[illegible]の白山　汐ゝ
支梁

口切
弟子ハ泉州堺伊集丁
利休居士前九粗氏有
句意ハた茶のすゝし
[illegible]
[illegible]
[illegible]或ハ[illegible]
[illegible]宗祇
[illegible]泉の
本間乃和

口切
堺の[illegible]
[illegible]　汐ゝ

梅宗や
第一句ハ不及解
霜の事哥
白露や
第二句
其外はい浦風さそふ
箱舟やくさり
明し舟ならん
且ハ旅とかれ物過
の白露をする自在体
埋火や
第二句ハ客の新なり
古年の絵なとせのよ
昔し唐牛琥などいふ
人の佃人の画董とさらせる
とて下心の所にそとれ

梅宗や右官恋しき鶯の家

かゝる住居を一夜忘むし　汶多

白露や浦風さそふ舟の家

明ぬるや雲はなくれし　汶多

田水　旅館にて

埋火小し客ハ客の新居

時の旅とかし酒　汶多

かはと失つ爰入

埋火もきりて訓の享る言

我明けよ寒苦成きむ　汶多

住にけ
第二句ハ玉巨旋
方になし旅人の心と見て
或説　住にけると炭
ほとの心ノ語
しいまく我くろ多れ
旅の心をと見句味し

こゝろ人にはいはゝも糸
葉なる旅の寓りのあやまき
君と得し

住にけり旅のみや玉巨旋

まゝしハふねの長さ我風呂　汶多

こりくむ客えしの火桶

手をれ更けり国の花さ　江戸

霜の夜

霜の夜炊火桶

冬の夜ふかし伸具の若　汶多

霜の夜
第二前書ハ古と怒
物上て客旅をと几
旅ならん火桶の物より
冬の年明白也
画ノ炉よと在ると
客ハ最も所見し古き
又火桶の画くら陳氏香圖
其様又あそぶ
物に火桶炉よ

あらんハ夫の所にし

明し倍の我見川の事　江戸

亨つよき境
如亀しと
二章一巻あね
不小明

亨つよ花境帆柱ちまき入れバ
江中しきり一我多ち　江戸
如亀しと帆柱ちまき入れバ
羽利し江中船雁野　江戸
風ましく参れしし
我ちへて下新割しるちまき
評のおしわぬる頭生　江戸

我ちへて
弟子行棉ちおど
おんあ

夜ちへしおしく一尺八寸ちまき稀の花
月半天に霜も玉やと　江戸
ちまきと二八藤吉もさ
椎の子おし戴せ言　江戸
我子供し手鉄ちまき
月待氷の富の松葉　江戸

ちまきと
弟子行　翁紙人
吉田駅夜伯
我子供し
弟子行　麻書
三州下地子や
しししし

蒐句
弟子行ハ只ちまきと
早く出して行ふ
途ん蒐とされと
洗月の影し句
まくれ袖の泥えて
ちまき

續　山月　宗房

蒐句洗ひちるちまき
庵のちぎれ風　江戸
おしたや月も泉かたな
雨しきりしと草林の風　江戸
月の眉小夭さえ　日本月
やさし咲きや声も押て　江戸
狂句風の兵ハ鮒多ちかバ
ゆしあしもあるの信ぬ　江戸

狂句風の
弟子行ハ竹ちあ門さえ
おゆし山眉雲蓮の花
翁の行の竹本ハ花
ちりおよ成ハ涼しく
竹ちらいちまき雲伯ほ
雲の如くしと上りし
狂句とあれるの弟子行ハ弟子門の喩さとるあよ故に又此外
ほ行の句ちハ信し此とかハ不信し之此行あるゆの不敢
山風ちしめりし翁医師し然とも生質行し貴きも
写しとも不記如中すれし故にし信房と聚りし雲伯の風学
とあ三行の作くちり此如門の中りし白眼に升とき從ゑ一人佳朝
雑書の作ありし竹秋のよりて我とよ置りとちあり

風の段ヿ
蕉門ハ吟ゟ　粗ア
叶ハずゞい　しれ
予作ハ風の雅御芸
も有と也しし
月居の体ハ風雅有し
橘久や
蕉門ハ只可しんほ川名ん
何しし子とりひぬ
や素さま縁の状
如ことし　女とし
方甲しし川風の理
めれことし

風や行し隠し待りね　江戸
きりし夜の朋し雅無糟　江戸
未枯や剥雀痛し公の鳥　江戸
おほ行し伏し主府の音　江戸
風の底しきのえる新御芸　江戸
雨あし雪ふ氏いあの庵　江戸
橘久や菜と風の身しもして
おのれ月む嵐し掛　江戸
蕉門耕ち子也
未枯し白也凡し風
鳥夜と默と夜の枝折戸　江戸

風の君吹戻る　福かし
尾しよ行きえやる山音　江戸
鳥ふし家と探えろ枯也
川風の雨の限も風流　江戸
大道しるの道希居士芳名
中まきへ久き流やきえん
まもと参し御さりと
待ん初の一日の君を帰なむ
まやこ回し尋もちろ也

その彩
蕉門大圓居士ゑ好
情と秋の思しとや
日かし　早か
枯かる枝の丈とゆる
不信の行し

その彩名名枯の枝の人
所しもさる西へ入月　江戸
雨の待しそろ　江戸

雨待し
蕉行
ふくしさひ見えくとしへ御地の
川やてん庵行もり
山家集

雨ふ行し茂しゝ辛気のむゆは
新也かかりき身の暢行　江戸

ふく風枯し
芭蕉翁とこれを
しるさん

こがらしの
芭蕉ノ蓬生のよには
大体荒れたれども
生涯の外とされども
此の枯葉にして
富るくさみなし
閑窓中の飢を凌
く片辺の侘や云
のよし

三尺の
芭蕉ハ世を離
るもの心しりの
来れ居れどもかゝ
三尺の山僅か庵
山さしもみるの
れハ降きと侘し

三尺ハ高サ二四面山

さかのれ庵とらうさしおす十の程　汀月

ふく風枯しさくとおす　深

川しし氷らぬ

艶目ノ侍す社頭七つ枝れ

笑代ハ到れし叢ノ陰の

こがらしや枯ノ併写よ富ル　汀月

神のしる此師今宵

三尺の山も嵐の木の葉ル　汀月

庵の四面ハ世とも蹲

明け寺所堂寺かの庭

竹樹寒し古石老ら

端るもとみかやのめ守ろ　汀月

雨くさの行きと庭の落葉かな　汀月

寒さともかくもおのども

多度神社と拝しける途

日朋来国の楽みと服せ

こすもとみもとやと落葉かな川

賓の初袖さくれ　汀月

宝永より
芭蕉ハ貞享甲子年の
十二月出月より此の
往う野尾の間ある
之暗猫し居るよ
門弟のそれ
同人二人併れ没して
時々とまよ不知去れ
伝余了行御何侍
人それるも何を侍き
と風よ　そありもの風土ト木因
谷川深き押かの楽書本国さ　又芭蕉のむらうさ
其主角　濃州大垣　邦州深川
四季れしの句をれくとあり　市人谷丸之加　桃青回志ノ句高人
こし出るとに至心　宮守よし　乃芭蕉し名ら山ハ木因
公今て動何ハ大木のこ作りと如し　寄くるもうら芋木因
時もし我が皮のるゐハとさ帆風そ
楽名ありらハ此舟とおしめく

かはの
芭蕉　おこの従とけ
すゝめしれ　首て
徳具しはしと見雅の

かれ丹あるよ　守れはしさす

潤しく一さかん岸の守　汀月

骨髄に出入し雪中に四時の花を咲かせ其の事に至る[illegible]と
[illegible]起情とあれ[illegible]風雅風情の
上に[illegible]感[illegible]古人の心の巧し
[illegible]
別章十日
一日東方西方山し
[illegible]井山記言
堂[illegible]海上目[illegible]
[illegible]の舟
八騎[illegible]
帆の[illegible]海[illegible]の
[illegible]

海上[illegible]日[illegible]とり
[illegible]
[illegible]の[illegible]
堂の[illegible]書

曙や餅の白さも一丁　治助

隠れなき出船の夜の市　治助

[illegible]日海上雨晴
[illegible]

鉄いまだ艶新しく七里と

竹田の杖下りし日に三日　治助

生まれし氷の海荒れ　治助

市の隣も早き春の日　治助

[illegible]二[illegible]と[illegible]

霰や[illegible]氷魚田上川
[illegible]
[illegible]
[illegible]氷魚
[illegible]網代の布
[illegible]

膳下の草庵と今日訪ふ

雨霰も網代の氷魚哉　治助

草庵に火燵し独の記き

氷苦く[illegible]
[illegible]
鷦鷯巣深林不過一枝
偃鼠飲河不過満腹
[illegible]

氷苦く偃鼠が咽を潤せり　治助

寒し[illegible]零雨一杯　治助

清滝し[illegible]洗ひ大根　治助

[illegible]伐られ[illegible]水仙

[illegible]玉と雨霰降る　治助

水仙や油の匂ふ酒五杯
[illegible]
[illegible]許六[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]肩[illegible]の人数　治助
[illegible]許六[illegible]

東隆
吾行ハ福律家の臥主より吾家の東隆行て寓家の一家の元文足へこゝと似よ只一門の恵を開律とえく此入の銘賞とも何ハ久長う元も軍ての仍はに福の林の銘言を打て次ハ酔畫と畫ゝアトの間ハ旅所物よ初う君会や物賞ゝ得をも思れらしとう余ねうく門得　御行のなく一点の外あ様も人ゐし

東隆　時雨して　稀に見る仏
腕して　浮る　波の　影形　汀分

ゆうりの雁　飛ゆう　東情

山寺　さめ　浜の　秋荒　汀分

こゝの寺や　東嶺千古居ニ
吾行ハ東嶺ハ作り宋壺山に
重陽の高と仰月了設
凡而九月九日も盛に帝し
唐も日影も盛と布し
吾行の外ゝ初し寺の
中庭露上祭俳徊
往来の翁の
居庭切ゝ
重陽の高と仰月了設
侍るゝされハ此をさめくこ
もやゝ菊花開時是重陽
とゝろ心とて久居重陽
の例なれも〇ハ外
こゝれ口の例

東のさや庭に仰ぐ
居の庵
雨の夜の軒の月も行秋　汀分

旅つかれ
吾行ゝ画面作
こゝろくし万のれの
季作りて大根の
中食ゝ小坊主か
すゝし句にゐて
手向手も其意ヤ
アり

旅行　小坊主等や　大根畑
家路の向ひ有るき　汀分

言虎子　旅籠ゝ　菜根
と喫し

郎すれ　大根さき　鳴ト

秀猪れ　寺も　摸ハ徐り　汀分

貞徳翁賛

稗なや　こゝろ翁の九頭ヤ

早まれ　長し年の秋の感　汀分

川行や　ゆき浮子のさも
これり

雨れ　さきしみし　有るを出　汀分

三州白雪と云者の子
二人桃先桃都と

[illegible]

霰降る　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雁 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] 雪仏雪布帛[illegible]
[illegible]
詩夜下[illegible]
雪の日信[illegible]

[illegible]

二人[illegible]
[illegible] 郎人[illegible]
[illegible]

二人[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
御射山行祭[illegible]
皆ハ三光[illegible]
薄の[illegible]
[illegible]
神[illegible]
[illegible]
[illegible]

積る二祖西脚埋[illegible]部[illegible]
及[illegible]も初祖[illegible]も動[illegible]
刀脇[illegible]仏[illegible]初祖[illegible]後仏[illegible]初但[illegible]仏[illegible]
[illegible]日飽食暖衣逸居而無教近禽獸[illegible]
[illegible]忘[illegible]子[illegible]長[illegible]

庭[illegible]高[illegible]筆[illegible]

余[illegible]更[illegible]胸の月冴[illegible]

前書

市人[illegible]雪[illegible]市の金[illegible]

世[illegible]中[illegible]年の秋[illegible]香[illegible]

馬[illegible]人[illegible]旅の[illegible]の思[illegible]

[illegible]

[illegible]雪[illegible]心[illegible]

中[illegible]と白[illegible]人[illegible]

[illegible]月之雪之[illegible]会

[illegible]

[illegible]

[illegible]

續山井

宗房

[illegible]

三河の半生 元月 [illegible]

宗房

霧交る 帷子ハ小仏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふるの底たきりのの
情しいなの蕪白 能け 蕪

杵 折賛

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元禄七甲戌冬十月八日夜

病中吟

[illegible]

[illegible]

再吉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古今
[illegible]
[illegible]
後拾遺
[illegible]
[illegible]
古今
[illegible]
[illegible]
古今
[illegible]
[illegible]
古今
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　宗周
[illegible]　[illegible]
[illegible]　雪吟
[illegible]　[illegible]
[illegible]　貝室
[illegible]　[illegible]
[illegible]　湖雪
[illegible]　[illegible]
[illegible]　玉周
[illegible]　[illegible]
[illegible]　素堂
[illegible]　[illegible]

[illegible]　玄来
[illegible]　[illegible]
[illegible]　昌角
[illegible]　[illegible]
[illegible]　嵐雪
[illegible]　[illegible]
[illegible]　鬼貫
[illegible]　[illegible]
[illegible]　許六
[illegible]　[illegible]
[illegible]　丈士
[illegible]　[illegible]

文秀
汶分
本郷
汶分
正秀
汶分
曲翠
汶分
乙州
汶分
万千
汶分

雎鳩の楽
雎鳩の楽
汶分
千那
汶分
形凡
汶分
李田
汶分
祐通
汶分
桃隣
汶分

西堂
汐分
風国
汐分
汐村
汐分
不道
汐分
惟然
汐分
凡兆
汐分

荆口
汐分
不角
汐分
舎羅
汐分
土芳
汐分
五国
汐分
卯七
汐分

不ト　汝分
西蔵　汝分
二公　汝分
嵐蘭　汝分
一日朋　汝分
昌房　汝分

如行　汝分
尚白　汝分
越人　汝分
晋中　汝分
漢竹　汝分
祥分　汝分

夏冷し雁とらえて[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

和撰て心の内に祝とて於今の菜果を神と
頂き一枚の紙衾　氷吾の海苔に俳諧の座と
なり先祭礼の風に元朔の座と扱い初め孔雀
蟬の宮に七月中旬に始まり毎月例祭
と説き一世好みの旅衣裏表珠と思ひ
の嘉言金言行脚仰命金祖翁の深意と
称して時と遠と(遠)と原の
喝然として安らかに
居ると歌のい平常往生往生と忘の名
蔭翁の安心信仰し嘉永元年
のなりとて夫伊勢人荒木田守武は神職
生れ誹諧の句集遺祖仁の名に天文

八年己酉八月廿七日に詩世を其古ぬ名を
忘れ名を又も弥生の花の
こ尊き一生三百年の法の度の人も且言の葉食意と知人
耳に打て有り中古打ふ名徳に乗應二年癸巳
十月五日の年八十三歳の詩世ハ人のいろ
門の心の玉ケ二ていろ行ける人　ケ二更
神仏高ふ浄心に芳雄　守武四　勢州
愛社に祝い貞徳と柿園の經歌に主ら云
侍奇ふ詩世に名を三ら月に我　翁ハ乾坤
無住の花を俗と幻庵　角の如名
蔭果を御に新に元禄七甲戌
十月八日の夜に枯に夫の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やうゝ拙作をのこす事を思ひ立ける
無悔拙稿七十年の余意と悔のみも
発言をもとめ多くの言と辞世を仰ぐ
十二日いと寒く日くれ行年五十二霜と一期と
終の事原直善拙作を乞ふの序かける
序文しを見人世を過ること旦暮の速なるを
奔ふ和歌の辞世あり
老とあり 大巡の鐵心万載 初冠嵩心
甲子辛甲子辛天時竹体の翁し仁威
ア仁年の〇あり五七五の風恩を忘れとあり世
華しを仁ひも長寿恩忘れより安永癸巳
冬時雨月正富子生国尾張春隆徳寿山清浄寺

人もしたゝめ考へ所おの短冊と竟
ゝ一項集乃ち傳の集を保ちんね
ア示好も報恩謝恩志事世の遺言と
こい集ゝ十年ゝ加と一部請解の頭書と
加え設ゝいや庵中ゝ無ゝ所ゝ運往
乃ちゝ童家の紳介ゝ庭ゝ
風狐筆の窓ゝ
四人ゝと耕人つゝ 彩部ゝ

安永四乙未中秋

秋の月

蓬萊

蓬萊五十部之内 巻数二百冊
此過去種々大般若書写いたす

こゝに集めて十年以前と一部一部請解の頭書と
加え設けいまの方中に入れる匣伝
乃ち一冊の編成といて庶幾
凡例巻の窓にて一冊ごとに
四人と称する部の

文化乙丑中秋

林氏藏書

昌平坂學問所

肯五十部之内　巻數二百冊

此過去種々大般若書写いたす　翁忌

頻りに先人の遺志を継ぎ
世業と呼ぶ所の恩を報
而後社中の人と共にその
いまだ未完の過多なる事を
恐れる

十六林鵞峰人